The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	天理人欲説の淵源につきて
Author(s)	松山, 直蔵
Citation	懐徳. 1925, 3, p. 32-38
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88713
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

の繪畫史上に特筆すべきことである。（畢）

天理人欲說の淵源につきて

懷德堂教授　松山直藏

天理人欲の說は、支那儒學の教說の上に於て、極めて重要なる位置を占め、殊に宋儒教說の中心を成せるものなり。而して其の說の出づるところ樂記に在り。然れども、其の思想の淵源するところは一般に大禹謨の人心惟危道心惟微に在りとせられ、三代以上の思想として、堯舜以來傳授相承するところのものなりと信ぜらる。尙書古文の僞を疑ふ朱子にして尙且つ然り。況んや其の他の儒者に於てをや。されど、淸朝に至るに及び、考證の學漸く盛んにして、經典につきても本文批判の風起り、尙書僞古文の辨明聚となり、大禹謨の如きは僞古文にして、人心惟危の四句は荀子解蔽篇に原きて僞作せるものなること明白となりたれば、今日に於ては、たゞ大禹謨に在りとの故を以て、三代以上の思想なりとは信ずること能はざるに至れり。今少しく樂記に見えたる天理人欲の說に就きて考査を試みんと欲す。

一、樂記の作者

天理人欲の說は、禮記の樂記篇に見ゆれば、天理人欲說の淵源を考ふるには、先づ樂記の作者に就きて考へざるべからず。然るに樂記の作者につきては、古來異說あり。第一は漢書藝文志の說にして

武帝ノ時。河間獻王與ニ毛生一。共ニ采リ周官及諸子ノ言ニ樂事ヲ者ヲ。以テ作ニ樂記ヲ。

と曰ひ、西漢の河間獻王と毛生との共に作るところにして、其の采るところは、周禮と諸子とに在りとなす。

第二は隋書音樂志に載する梁沈約の上奏中にある說にして、

樂記取二公孫尼子一。

と曰ひ、其の采るところ、公孫尼子に在りとなす。公孫尼子は或は孔子の門人なりといひ、或は七十子の弟子なりといふ。第三は王應麟の困學紀聞に引ける宋儒致堂（名寅字明仲）の說にして、

樂記ハ子夏ノ所レ述ル。又云フ。樂記ハ子貢ノ作。

と曰ふもの、第四は宋儒陸象山淸儒姚首源（名際恒）我が伊藤仁齋等の說にして、

樂記之言亦根二於老氏一。（陸象山語錄）

人生而靜四句。此レ文子引二老子ノ語一也（姚際恒禮記通論）

樂記雖レ有二天理人欲之言一。然レドモ本ト出ヅ於老子一。（伊藤仁齋語孟字義上）

と曰ひ、老子に出づとなすものなり。今此等の四說を檢するに、先つ第一說に就きて考ふるに、漢書に據るに、毛萇ハ趙人。爲ル河間獻王ノ博士一。とあれば、藝文志に毛生とあるは毛萇のことなるべし。又志に據るに、文帝の時、魏の文侯に事へたる樂人竇公を得て、其の書を獻ぜしめしに、周官大宗伯の大司樂の章なりさとあり。されど、河間獻王が毛生と共に采りし周官は、果して大司樂の章のみなりしか、はた他の樂事をいへる部分をも含みしか、今は明かならず。諸子とは如何なるものなりしか。藝文志には、樂六家を載するに、樂記二十三篇が首にありて、それより以前の諸子の名見えざれども、今樂記中に其の名を存する子貢子夏竇牟賈の如きは、何れも孔子より樂を傳ふるを見れば、所謂樂事を言ふ諸子の一なるべし。韓非子顯學篇に、孔ノ子の後八儒に分れたることをいひ、其の中の仲良氏を陶潛の群輔錄には、仲良氏傳ヘテ樂ヲ爲シ道ト。以テ和シ陰陽ヲ。爲ニ移シ風ヲ易フル俗ヲ之儒一。といへるを見れば、仲良氏の如きも、また樂事を言ふ諸子の一なるべし。又當時の敎學界の上より考ふるも、墨子の學派に於ては、非樂の說を唱ふれば、之に對して、儒家に於ては樂を力說し、之を尊重するものゝ輩出せし事は、想察し得らるべし。又樂は情性感動の發洩するものなれば、

從つて樂を論ずるには、勢性情を論ずるに至るべし。王充論衡の本性篇に、世碩を始とし、宓子賤漆雕開公孫尼子能く性情を言ふことを叙せり。此等諸子亦樂事を言ふ諸子ならんか。隋書經籍志に公孫尼子一卷あれば、梁沈約は必ずや之を覩たるなるべし。而して沈約が樂記取公孫尼子と云へるを見れば、樂記の一部分は公孫尼子に出でしものなるべく、從つて樂事を言ふ諸子の一なること明かなり。されば漢志に所謂諸子の樂事を言ふものとは、孔門の諸子幷びに其の學を傳ふる徒なるべし。今の樂記は一篇なるも、漢志には二十三篇とあり。又別に王禹の傳ふる二十四篇の樂記あり。何れも河間獻王より傳はりしものなれども、同一ならざりしものゝ如し。別錄に據れば、二十三篇の目全存せり。而して今の樂記は其の中の十一篇を合せたるものなるに似たり。自餘の十二篇今傳はらず。今の樂記には周官の大司樂章を始として、他の樂事を言へるものの采り入れられたるところなきを見れば、それらは他の十二篇中に采り入れ居られしものならんか。

第一說に從へば、樂記は孔門諸子幷びに其の學を傳ふるものゝ樂を論ぜしものを、河間獻王が毛萇と輯めしものなり。この說は劉向に本くものなれば、劉向が武帝の世を距ること未だ甚だ遠からず、又中秘の書を校せしことより考へて、其の說の必ずや確據あるべく、決して鑿空杜撰にあらざるを知る。依りて其の最も信憑すべき說たるを知るなり。次に第二說につきて考ふるに、梁の沈約が公孫尼子に取ると斷ぜしは何に據りしか。漢志には儒家に公孫尼子二十八篇、雜家に一篇あり。隋書經籍志には、二十八篇の公孫尼子は存せざるも、雜家の一篇は儒家中に存せり。されば沈約は二十八篇の公孫尼子は恐らくは之を覩ざらんも、一篇の公孫尼子は之を覩しものなることは殆んど疑ふべからず。是を以て之を觀れば、沈約はその篇中に樂記と相合するものあるを認めて、此くの如く斷ぜしものなるべし。特に論衡中の記事は公孫尼子の主樂論者なりしことを旁證するに足る。されば公孫尼子は既に上にも述べたる如く、漢志の所謂諸子の樂事を言ふものゝ一人にして、樂記の其の說に取るところあるは亦疑ふべからざるに似たり。次に第三說につきて考ふるに子貢子夏の作といふ說は、樂記篇中魏文侯と子夏との問答、又師乙と子貢との問答あるより、單に臆測せしに

過ぎず。されど、子夏と魏文侯との問答は、文侯二十五年の事なれば、是時子夏年一百八歳なり。子貢尚存せんやと閣若璩の辨せるによりても、この說の毫も信據するに足らざるを見るなり。次に最後の第四說につきて考ふるに、道家に出づとの說は、天理人欲の一條が字句に多少の異同はあるも、今傳はるところの文子に、老子の語として出で居るよりしか云へるなり。然るに、これは後にも論ずる如く、今傳はるところの文子は全然眞なるものとは信じ難ければ、この說亦容易に信ずべからず。

右の如く樂記の作者より考ふるときは、其の最も信ずべきは、天理人欲の思想は孔門諸弟子の間に發展せしものなるに似たり。

然るに今觀察の方面を轉じて、樂記の天理人欲の條の本文の載せらるゝ諸書に就きて考ふるに、天理人欲の條は樂記以外、呂氏春秋淮南子文子及び史記樂書に見ゆ。史記樂書は褚少孫が樂記を取りて、補入せしものなれば、固より同一なり。今は數字を異にし、十一篇の順序相異なれり。今對比に便せんため、樂記呂氏春秋淮南子文子の原文を左に揭げん。

樂　記

人生而靜。天之性也。感二於物一而動。性之欲也。物至知知。然後好惡形焉。好惡無レ節二於內一。知誘二於外一。不レ能レ反レ躬。天理滅矣。夫物之感レ人無レ窮。而人之好惡無レ節。則是物至而人化レ物也。人化レ物也者。滅二天理一而窮二人欲一者也。云々（樂本第一）

呂氏春秋

生也者。其身固靜。感而後知。或使レ之也。遂而不レ返。制二乎嗜欲一。制二乎嗜欲一無レ窮。則必失二其天一矣。且夫嗜欲無レ窮。則必有二貪鄙悖亂之心。淫佚姦詐之事一。故彊者刼レ弱。衆者暴レ寡。勇者凌レ怯。壯者傲レ幼。從レ此生矣。（仲夏紀侈樂）

淮南子

眞面目を存するものなるべし。

人生而靜。天之性也。感而後動。性之害也。物至而神應。知之動也。知與レ物接。而好憎生焉。好憎成レ形。而知誘ニ於外一。不レ能レ反レ己。而天理滅矣。故達ニ於道一者。不ニ以レ人易一レ天。外與レ物化。內不レ失ニ其情一。云云（原道訓）

文子

老子曰。上略 人生而靜。天之性也。感レ物而動。性之欲也。物至而應。智之動也。智與レ物接。而好憎生焉。好憎成レ形。而智出ニ于外一。不レ能レ反レ己。而天理滅矣。是故聖人不ニ以レ人易一レ天。外與レ物化。而內不レ失レ情。云々（道原）

今淮南子を見るに、樂記と稍々字句の異なるところあり。淮南子と文子とを對比するに、殆んど全く相同くして、其の何れかが他より出でしものなるは、一見して分明なり。然るに淮南子は漢初の作に係ることは疑を容れず。文子は唐柳宗元已に其の辯文子に於て、其の駁書なるを辯じて、其渾而類者少。竊ニ取他書一以合レ之者多。凡孟子輩數家皆見ニ剽竊一。といへり。されば、文子の此の一節は淮南子に出でしものなるべし。次に呂氏春秋を見るに、樂記淮南子と字句に於て大に相異るものあり。樂記と淮南子とは、大體に於て相同きも、呂氏春秋に於ては大に相異るものあり。

呂氏春秋は、呂不韋が當時の學者を集めて、各々其の聞くところを著はさしめたるものにして、周末諸子の學を網羅せるものともいふべく、しかも一人の手に出でざるが故に、一家の學に統一せらるゝところなし。清汪中も其の呂氏春秋序（代畢尙書作）に勸學誣徒尊師善學四篇。皆敎學之方與ニ學記一表裏。云々といへり。淮南子も其の百家を網羅するの點に於ては、呂氏春秋と相同きも、呂氏春秋が各家の眞面目を其の儘ま存せるに反して、淮南王劉安の手裁を經て、道家の學に統一せらるゝところ大に相異なるところあり。今呂氏春秋に大樂、侈樂、適音、古樂、音律、音初、制樂等の諸篇あり。此等は恐らくは諸子の樂事を言ひしものゝ

因つて考ふるに、樂記淮南子等に見ゆる天理人欲の一節は、其の原形は呂氏春秋侈樂篇のそれに非るか。而してこれ漢志に所謂諸子樂事を言ふものゝ一なるべし。樂記は漢初の儒者が改竄を加へて、今日の形を成しゝものに非るか。今呂氏春秋に在る此節を觀るに、天理人欲の語なし。只だ天と嗜欲との語あるのみ。而して天の字は高誘註には身と訓せり。淮南子原道訓註も亦同じ。されば、天理人欲の對說は先秦に於ては未だ之を見ず。理欲の對說は道家の說に多きも、老莊列三子に於ては未だ之を見ざるなり。老子は欲と天とを說けども、未だ理を說かず。其の說くところの天は、天理の義に非ず。列子は諸處に理の字を用ふるも、未だ理欲を對說せず。莊子は養生主天運兩篇に於て天理の語あるも、前者は腠理を指し、後者は人事に對する天理なり。而して未だ理欲を對說するものを見ず。又莊子に於ては、天と人との對說諸處に見ゆるも、これらは皆無爲自然と有爲有心との對說にして、天理人欲の對說に非ず。此等の事實は、天理人欲の對說が比較的後世に在ることを證するものなり。

然るに荀子解蔽篇に故道經曰。人心之危。道心之微。危微之幾。惟明君子而後能知之。とあり。この人心道心は天理人欲と全く語を異にするも、其の概念に至りては相一致するものなり。道經の何物なるかは、今明かならざるも、解蔽篇が道家の貴ぶところの虛一と靜とを說ける邊より察するに、道經亦道家の經に非るか。果して然らば、天理人欲の對說は先秦には見えざるも、理欲對說の思想は已に道家の間に發達せしものと考へ得べし。

然らば天理人欲の對說は果して何人の手に依りて、樂記の原形より改作せられしものなるか。これ輕々に斷じ得べきことには非るも、姑く臆測を逞うせんに、毛萇の師毛亨は、荀卿より其の學を傳へたるものなれば、毛萇も亦其の學を承け傳へたるものといふべし。從つて毛萇の徒が人心道心の說より、其の樂記を輯むるに當りて、天と嗜欲との語を天理人欲に改めて、兩者を對說し、今の樂記樂本篇の形に成しゝものには非るか。若しこの臆測にして誤なからんか、理欲對說の思想の淵源は或は先秦時代に存すとするも、天理人欲

の對說は漢初に始まるものといはざるべからず。

淮南王安と河間獻王德とは同時代なれば、淮南王が河間獻王の作りたる樂記を取りて、之を其の書中に收むといふことは信ずべからずと難するものあらんも、これは樂本篇が二王の下に集りし學者の手に依りて、今日の兩書の形となりて傳はりしものと見ることを得べし。又荀子に樂論篇のあることは荀子が已に樂記を看たる證となすべきに似たり。然るに荀子の樂論篇を觀るに、今の樂記中の樂化樂言樂象樂情の一部分を採りて、其の大半を成せり。因りて考ふるに、樂記は其の樂本以下の十一篇は、むしろ漢初の儒者が荀子の樂論篇其の他諸子の樂事を言ふものを併せ采りて、之を類編して作りしものに非るか。しか考ふるときは、今の樂記は荀子以前に存せしに非ずして漢初に作られしものなること、漢志の說の如くなるべし。されど其の資料は固より先秦に在り。但だ樂本篇天理人欲の段に於けるが如く、漢初の儒者の改竄の手の加はりしもの必ずや少からざるべし。